

## いち早くタイに進出、「共創」をキーワードに競争に打ち勝つ

株式会社森田スプリング製作所 奈良県生駒市

身の回りの半径5メートル以内にはバネがあり、裏方として人々の暮らしを支えているという。創業以来80年以上の長きに渡り、スプリングメーカーとしてバネ一筋に歩み、現存する関西のスプリングメーカーとして最古の歴史を誇っている会社が「株式会社森田スプリング製作所」である。

同社は、「創意と誠意のモノづくり」を心がけ、厳しい競争環境のなかタイにいち早く進出し、確実な成長を遂げている。

### 会社概要



会社名：株式会社森田スプリング製作所  
所在地：奈良県生駒市山崎新町8番25号  
電話：0743-73-2517  
FAX：0743-75-3009  
創立：昭和32年(創業：大正11年)  
代表者：代表取締役社長 森田 壽志  
資本金：1,000万円  
従業員：35名  
事業：各種スプリング、板バネ及び線加工の製造並びに販売  
URL：<http://www1.kcn.ne.jp/~moritasp/>  
E-mail：[moritasp@kcn.ne.jp](mailto:moritasp@kcn.ne.jp)

### 関西で最古の歴史を誇るスプリングメーカー

近鉄生駒駅から宝山寺へ続く旧参道を少し歩いていった住宅地の一角に、約2,000種類のバネを製造できる関西の代表的なスプリングメーカー「株式会社森田スプリング製作所」がある。

同社は、創業以来80年以上の長きに渡りバネ一筋に歩み、堅実に発展を続けてきた。現存する関西のスプリングメーカーとしては最古の歴史を誇っている。

大正11年、大阪市此花区で大阪スプリング製作所として創業。昭和20年に空襲により被災し解散。翌年、現在地で再出発し、森田スプリング製作所を創立。昭和32年に株式会社となった。その後、家電業界の伸展とともに、バネの多品種化とニーズの拡大に合わせて工場設備の増強を図りながら、品質を第一とし、生産、管理、販売の強化に努めてきた。

### ユニット製造や試作・少ロット受注にも対応

同社は、家電用のスプリング生産が中心で、各種線バネ、各種板バネ等プレス品を主要製品としており、特に線径の細かい精密スプリングを得意としている。また、バネを他の部品と組み合わせた防振機構等のユニットの製造も手がけている。



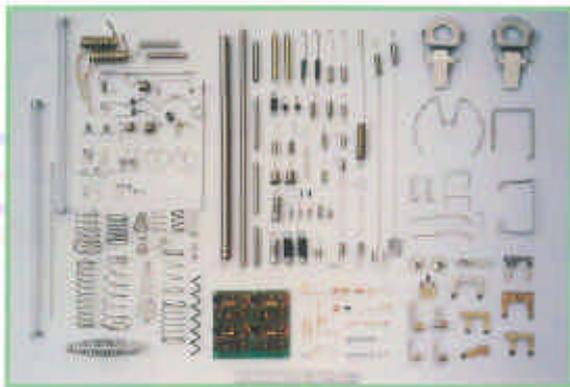
本 社



「MORITA SPRING(THAILAND) CO., LTD.」(M・S・T)

設計から製造、品質管理まで一貫した生産体制を整えており、高品質な製品の提供を行っている。試作品のバネ1個だけの注文や少ロット受注にも対応し、メールや電話によるスプリング設計や見積りも行っている。また、取引先の新製品の企画段階から参加して、新しい部品を開発する販売戦略も展開している。

本社3階の事務所前には、同社で製造している様々なバネが展示されている。OA機器などの精密機器の中で部品を押さえる「板バネ」や、洗濯機の洗濯槽や冷蔵庫のコンプレッサーを支え、振動を吸収して滑らかな運転を支える「圧縮バネ」、可動部分の動きを円滑にしたり、部品を所定の力で保持したりする「引張バネ」など。



バネ製品群

関西スプリングメーカーのトップを切ってタイに進出

バブル経済の崩壊の影響や、円高に伴う大手メーカーの生産拠点の海外移転などは、バネ業界にも変革を迫ってきた。

大手ユーザーの海外進出、海外生産に合わせ、平成6年、同社は関西のスプリングメーカーとして初めてタイに100%子会社の工場「MORITA SPRING (THAILAND) CO., LTD.」(M・S・T)を設立し、タイでのスプリング製造を開始した。

当初M・S・Tは、敷地120坪、日本人2名、タイ人5名、マシン4台という小さな会社でのスタートであったが、現在では敷地1,400坪の広大な工場に約200名の社員を有し、タイ有数のスプリング

メーカーへと発展している。

「M・S・Tの現在の取引先は、複数の大手家電グループをはじめ約80社にのぼっていますが、これは現地社員の営業努力の賜物です。15年度の売上は、本社工場の売上を上回る勢いで増加しています」と、社長の森田<sup>ひさし</sup>壽志氏はM・S・Tの成長ぶりを喜んでいる。

15年度の経営のキーワードは「共創」

森田社長は、15年度の経営方針のキーワードとして「共創」を掲げ、M・S・Tと共存共栄を目指し、共に生き残り策を見いだそうとしている。その主な取組みとして、M・S・Tとの交流とバックアップ、新規ユーザーの開拓、金型の内製化、人材の育成などを行っている。

実際、森田社長が取引先に対するセールス時の常套句として使っている「品質と納期は日本製で、価格はタイ製で提供します」という言葉は、M・S・Tとの「共創」そのものを言い表している。

また、「メーカーは技術力を落としてはいけません。国内でも新たな設備投資を予定しており、品質向上と生産コスト低減の両方を追及していきます」と森田社長が言うように、生産技術の要でもある金型の内製化については、2年前から取り組んでおり、技術力の強化・蓄積を行っている。

「M・S・Tの成長は、日本人社員の若い3人がタイで潜在能力を発揮してくれたおかげです」と森田社長は言っているが、その裏には若手を起用して大幅な権限委譲を行うという、若手に活躍の場を提供する森田社長の積極姿勢があったからであると思われる。現在も人材育成のために20代の若い社員にタイで働くチャンスを与えている。

「身の回りの半径5メートル以内にはバネがあります。バネは裏方として皆さんの暮らしを支えています」と、森田社長はバネへの思い入れを語っている。このバネへの思い入れと「共創」の取り組みがうまくかみ合いながら、同社は今後も発展を続けていくと確信する。(島田、山城)